





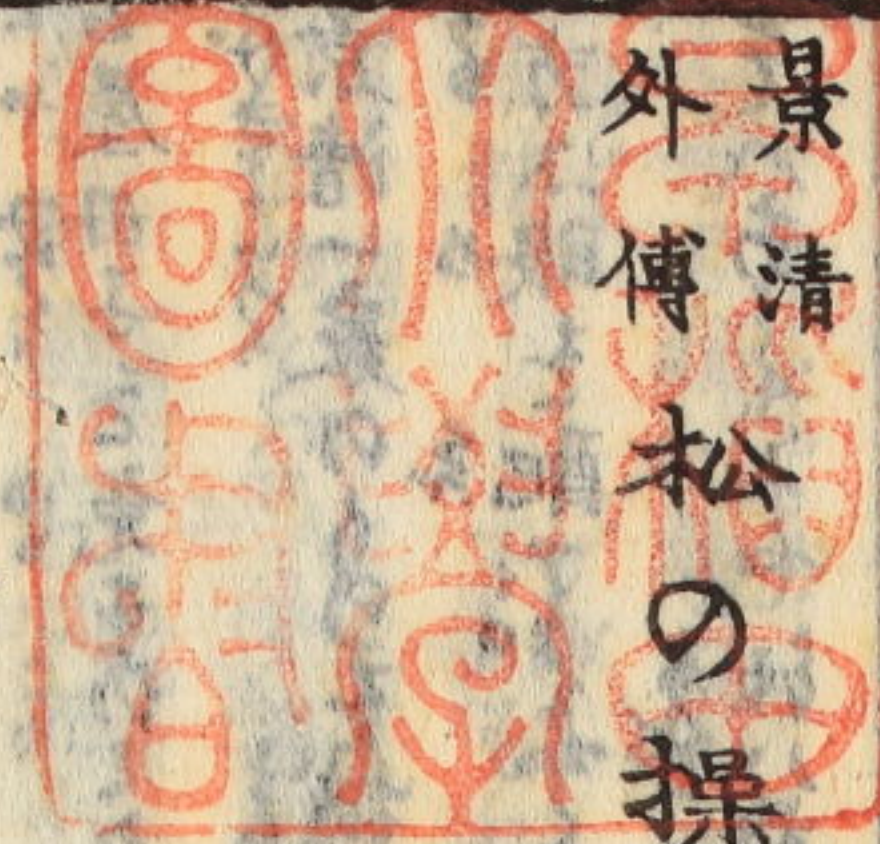
 詩
 集
 卷
 三
 編
 五

^ 13
 2891
 15



門へ13
2891
巻 15

景清
外傳 松の操 三編 卷之五



東都

絳山 藏 編

七月三日

第廿五回

宿茨の謀小詣りて姪女を失くし
琵琶の音小導りて父親をゆるり

且説十三人九ヤヤ夜双御前あのみ相別とふ戸平沙夫あつと婦あつととあつと連つらて日向ひなたをあつと急いそぎあつとが
往ゆてあつと彦山ひこやまのあつと簾すだれ小徑せうけい過あつとぬあつと矣あつと時とき既い小天あつと暮あつとてあつと雨あつとさあつとそあつと降あつとぬあつとれあつと早あつとくあつと宿あつとをあつと索あつとふあつとこ
四方あつとをあつと尋あつとれあつともあつと名あつとやあつと一あつとかあつと彦山ひこやま九あつと洲あつと一あつとのあつと大あつと山あつとをあつと其あつとのあつととあつと近あつときあつと邊あつとハあつと平あつと日あつと小あつと雲あつと霧あつと閉あつと閉あつと
籠あつと一あつと幽陰ゆういんのあつと地あつと方あつと多あつとれあつと住あつと人あつともあつと女あつとやあつととあつと只あつと一あつと軒あつとのあつと白あつと屋あつとなあつともあつととあつと奈あつと何あつと見あつととあつと果あつと然あつととあつと
暫あつと時あつとイあつと居あつとりあつとりあつと時あつと小あつと面あつと前あつとのあつと杜あつとのあつと裡あつとよりあつと七あつと八あつと人あつとのあつと大あつと漢あつと子あつと腹あつと巻あつと小あつと手あつと膈あつと當あつと一あつと各あつと
手あつと小あつと十あつと手あつと携あつとてあつと前あつと往あつとをあつと止あつとりあつと這あつと裡あつとをあつと白あつと眼あつとへあつと扣あつとりあつと時あつと小あつと頭あつとめあつときたあつとるあつと漢あつと子あつと進あつと出あつとて

景清三編卷之五

きりくろいふ十一兼基某るハ梶原公の内内小中の人を知る馬場忠太あるをりし。
汝一家を召捕と豫て殿の命を稟其地方を待する久し。疾傳を受べしと声
高かふ呼をり十三呵ととち笑ひといひぬ云るや我ら身ハ務御掟を破る
法を犯せし罪科の免るべきのされば召捕らるべき所謂あり其所まで進らぬと
人丸をとりし身捕を忠太孫か云うるハ汝ホカ身小答あくと。主君梶原公と。畠山重
忠と。鑑倉殿の御前や。景清を召捕と。嚴命を蒙り。梶原公のハ人丸を捉へ
惹て其母阿古屋をさく六依羅小百寄り人移。小畠山重忠ハ景清ガ勇を忌怖。河
古屋母子を免まのり。あつくこれを鑑倉殿不辱。梶原公のを諫ま。主君これを憤り。
景清一家ののりを捕へ其諺を亂んと我をゆるく我をゆるくをりて其不遠べりと云うち
四方小眼を配る。そくも平次を見想。訝りたるれりち。其所小居。入道ハ平次
あてハあふふや。汝ハ前年我を捕へ取を去へし怒あり。よき當時ハ出會たり。其の

を召捕へ報ひをえせん其所退か。手下ののりを顧て。其奴もも漏らさず。生捕へしと下知され。心はく。一般不十手らう。其後。物。や。十三ハ腰
刀を投る。其勢を對ふ不致。入道。平次入道これを見。豫て準備の戒刀り。十三を獲んと必死ありて。働き。原来刀法不委。十三前小進。のりとも。二人追
切。二人ハ女を負まれば。あふ。小怕。小兵ののり。叶。ト。のりと。逸。出。一。般。不
逃行を何方までりと。十三平次殿を暴ひて。逐行ぬ。跡。小遺。る。人丸。小聖。危。し。思。小
其所へ思ひ。ゆ。ぬ。林。裡。より。五。三。人。の。小。兵。の。のり。現。出。て。のり。を。云。ん。人丸。を。投。る。え
と。雪。ハ。驚。き。慌。忙。く。中。ト。と。支。止。ま。一。人。の。小。兵。足。を。揚。げ。小。雪。を。撲。地。と。跳。毛
せ。急。死。お。當。り。ん。鳴。と。一。声。叫。び。け。其。後。を。所。小。倒。ま。伏。し。再。び。起。ゆ。り。後。
真。間。小。早。く。人丸。小。木。丸。を。め。て。声。を。止。め。何。方。と。も。あ。く。牽。ま。去。ぬ。も。知。ら。ざ。し。て
十三ハ。平次。と。法。とも。不。小。兵。を。遠。く。逐。ひ。失。ひ。原。の。地。小。立。戻。る。人丸。を。見。る。事。

限で微の調の乱とこそ不審なれ夫微乱るれば哀しむと猶も小愁心を懐くもの共
 邊不才て我禪る琵琶の音をばあてはあきさるやと夫想ふも其地方ハ籠籠の景の
 辺鄙なれば琵琶をばあて人あてくを涙くを考ふ今夜もあつ小回りの懐ひ出て
 愁しむとこの故少やうつらん嗚呼淡猿しき心やと已むと己を取らむ折らる壺の弁
 面より一人の女案内といふ庵のほ主小物問やん教へてたゞ其所小平家の侍大持也
 七兵衛早昔大人の盲目とあつて居るよよと教へてたゞ又まのうまふは主也
 盲目とてとせへハ奴家が尋ねるかどうもやと云声鄙不才馴ぬいと懐くううう
 とてハ琵琶のまの乱れは其ののまほはるやと音のさぬ小女とあつて思ひや我見人丸の尋
 来つとあつたらん何れれ我を尋ねるもの小明白小名昔ある道心を挫くるりやあつて心を定
 めて立ち坐命は人ごとく其宮崎小爾る人のまをせりよとまははれと果とも盲目あ
 まはえんともあつていりら何方小住るを知らむ他不行て問ふととせししく回心

小の顔顔ととち首く我なるさぬもて類不流をさうたてて雅面命とせ
 むくせんといひくくへとあつて斯く奴家と人丸をいさう初雅て別きまじけあつ
 曾くさるさ今ハはと安の習せりよとささふ父内とこひなめかごとく最前よりは庵の
 外面小いと頼ひハハ琵琶の音の乱れを不審のひまのり獨り宣人其くを小の
 ばと知るまのりもあつ海山とてとつとつ小来る何故か父内小逢うて母人の宣ひ
 遺世言伺をばあ知しまつとまへ鳥啼東國よてとくと八重の志の仇母が日向小まつ
 難雅幸昔勝ととあつて父あつと名昔はつと人秘ととと嘆きそかき口説景清始
 後まのち小母の遺言ありとまはしてハ母小死別と我を見んとそいと遠き路をも苦を
 ちとと父を尋ねて来はるつや不徳のりの心や各素遭つて阿古屋がるのせと
 思ひ我をハはが父とんとせがまて誓一人九ハ今年俵小十一あるんあつて遠き
 強泊を登て獨りらふ来らんといと誂うまるともととと母ハ居るまとも十三附居る

りあればいりて一人来るべき疑うとありあつた後にも。愁心しゆうしんの塵小乗ちんせうじやうト。狛狸こびりの類るいの
 騙だまらせんと。心を鬼おにふし。まづうらむ。けいこき。さうり。き。小女こんなのふ。前まへのふ。景清けいせいハらの宮みや
 崎さき小来こきはるよ。聞きく。さうり。小見こみぶ。つ。も。景音けいね目めち。れ。ば。と。其その人ひとの。と。その。人ひとと。名な
 の。素すら。う。ぶ。ま。や。つ。と。鈍どんし。ど。ま。と。人ひとを。実まことと。せ。む。隠かくし。ま。ひ。そ。父ちち大人おとなと。釋はなけ。く。と。う。り
 放はなち。云いふ。嘆なげん。不ふ便べんさ。ふ。これ。ち。で。ハ。色いろこ。い。が。真まこと実まことハ。お。と。ぐ。尋たづね。暴あざふ。景清けいせいハ。去さ頃ころ
 病やまふ。か。を。失くた。る。よ。一。其その里さと人ひとの。風ふう声こゑ小こ。今いまハ。奈な何なに尋たづね。ども。逢あひ。絶たて。あ。ま。る。む。む。
 思おもひ。明あきら。め。故こ御ご小こ還かへて。親うや属らも。信しんを。知しら。し。父ちちの。亡なき後ご吊たぶ。と。そ。孝かう子しと。い。つ。之これ
 々さまざま。我われハ。兄あに才さい妻さい子しも。あ。き。孤こ獨どくの。身みち。れ。ば。便やすべ。く。只ただ顧かへ後ご世よを。願ねがふ。之これ今いま夜よハ。是これ
 彼かれり。の。小こ紛まき。大おほき。の。者もの経けい念ねんで。ぬ。今いまより。勤ごん行ぎやうま。し。て。ん。ふ。さ。ら。ば。と。さ。う。り。云いひ。捨すて。
 門かどの。戸かど撲つ地ぢと。ひ。き。な。て。庵いんの。狸ねこ小こ入いら。り。人ひと丸まるハ。父ちち親おやの。今いまハ。今いま世よ小こ亡なき人ひとの。數かず小こ入いぬ
 と。け。は。よ。う。も。こ。ハ。そ。も。夢ゆめり。真まこと実まことと。心こゝろも。乱みだれ。と。氣きも。消きへ。て。暫しば時とき泣なき。小こ沈しづと。と。其その人ひとに

庵いんの。狸ねこ小こ入いら。り。誦ま經ぎやうの。声こゑと。殊こと勝かた氣き小こ分ぶん々さまざま。サ。あ。て。人ひと丸まるハ。顔かほ々さまざま
 あ。び。て。お。の。中なかつ経けいハ。以もつ庵いんの。主しゆと。あ。り。ぬ。一。父ちち也やも。盲めくら目め不なま。り。く。て。契あひ地ぢ方かたと。け。つ。と
 正ただ一ひとと。父ちちと。思おもひ。ま。し。し。我われ身みの。う。を。せ。ん。ふ。と。そ。ん。失くた。せ。む。ひ。し。と。せ。て。そ。う。ま。し。我われ身み
 う。か。幼わか稚ちく。と。父ちち親おや小こ生せい別べつと。て。母はは親おやの。養やしやう育いくふ。け。て。ま。う。く。と。物ものの。う。ろ。を。お。け。る。お。お。お。
 近ちか候こう小こ母はは上の上の。父ちち也やの。う。を。是これ彼かれと。案あんト。煩わづらひ。ま。ひ。し。や。不な遂たすぬ。お。重おもき。病いづ着つき小こ今いま年としの
 春はるの。死しと。と。も。小こ散さん失しふ。ハ。悲かなし。き。と。且かつハ。父ちち上の上失し明めいの。へ。ハ。旬じゆん雷らいの。官くわん小こ進しんま。し。と。老らう樂らくの
 身みと。あ。り。と。ん。と。契あひ守しゆを。信しんじて。官くわん銀ぎんを。惣そうん。と。せ。し。る。よ。り。して。不な置ち冤えん罪ざい小こと。押おし。や。叙じゆ
 父ちちハ。八はち獄ごく小こ緊きんと。り。ん。と。ハ。我われう。ら。の。う。と。哀あはれ。く。罪つみを。贖あがふ。黄わう金きんの。な。り。小こ才さいを。川かわ竹たけハ
 沈しづん。と。平へい次じと。議ぎま。し。し。小こ知ち縣けん相さう公こうと。郷きやう人ひとの。情なさけ小こ罪ざいを。免めんさ。れ。て。叔おやぢ父ちち上の上恙やまふ。ま。を
 ぬ。の。を。感かんと。す。と。平へい次じ夫ふ婦ふの。叔おやぢ父ちち上の上と。信しんず。も。小こ奴なん才さいを。俱くして。豊ほう前ぜんま。で。来きつ。る
 知ち小こ不ふ意い馬ば場ぢやう忠ちゆう太た待たい伏ふくし。と。人ひとを。至いた捕とら人ひとと。前まへ徑ぎやうを。遮しや止とどを。叔おやぢ父ちち上の上と。平へい次じと。



人丸

平次

平次

権山



人丸

忠太

彦山の藤

忠太

十三

彦山の藤

假兵のものを切散し。尚進行一踏ありて奴家の馬場へ提へられ。その由いふあり
 しくと。衰しくも心を痛り。奉と行し其夜のうち。敵の油攻を窺ひて。忍び出
 け。足ふまじ。其所とも。知れを走り。小竹や佛の由助や。今夜不圖其地方。迷ひ
 来りて琵琶の音をなみ。不審く暴ひ。寄ぎ。一覗き。窺ひ。不初。惟時。おあり
 け。ふ。え。知。り。し。父。の。面。影。あ。る。人。の。琵琶を弾かせ。嬉しと。聞へ。ば。それ。あ。ら。う。で。父。の。世
 小亡人と。あり。ゆ。ひ。ぬ。と。び。ら。ら。ふ。お。れ。も。力。の。失。を。て。身。の。何。と。あ。る。ん。ぞ。思。ひ。く
 上。あ。り。世。の。間。不。幸。の。の。奴。家。の。も。幼。稚。て。父。不。別。と。母。と。叔。父。と。小。養。生。を。さ。ら。ち。も。後。住
 居。住。所。定。ま。ぬ。其。あ。ら。ふ。憂。る。身。く。或。時。ハ。獄。小。繋。れ。鞭。連。ま。と。或。時。ハ。貴。人。の。法
 前。小。琴。を。彈。さ。し。ら。れ。苦。眼。を。受。る。の。父。母。と。集。つ。て。憂。を。話。ら。ん。と。それ。を。お。れ。と。楽
 あり。て。堪。へ。し。甲。斐。も。情。あ。や。今。ハ。父。母。法。と。も。黄。泉。の。人。の。あ。り。あ。ら。う。と。も。知。れ。ま。し。て
 して。遠。き。海。山。越。て。ま。る。ぐ。と。さ。あ。で。呻。吟。来。は。る。る。の。知。れ。ぬ。り。と。思。ひ。ま。早。く。ま。

泉不赴ひて。急し。ゆ。り。し。き。父。母。と。仲。小。居。る。其。年。は。羨。し。思。ひ。し。他。人。の。子。供。の
 しく。父。母。小。橋。る。しく。あ。ま。ん。ハ。あ。ん。ぢ。う。嬉。しく。さ。き。不。急。う。り。の。ハ。最。期。ぞ。と。獨。り
 くら。つ。泣。く。も。小。石。拾。つ。て。袖。不。道。波。不。沈。ま。ん。ん。や。磯。辺。近。く。歩。ま。し。う。り。今。死。ぬ。る。身。を
 ち。り。く。の。喜。び。う。ら。ま。あ。れ。も。年。頃。日。以。子。の。ど。く。免。で。難。ひ。ひ。々。る。叔。父。上。奴。家。が
 身。の。果。を。入。も。し。は。も。あ。ら。う。と。ま。漢。ま。あ。ら。ん。限。り。も。知。れ。ぬ。鴻。恩。を。お。れ。を。う。り。報。へ
 して。前。へ。ま。り。ん。畏。れ。免。れ。し。叔。父。上。心。遣。り。お。れ。の。南。無。阿。彌。陀。佛。と
 して。合。し。既。不。死。ん。と。ま。る。奴。三。人。連。の。猿。人。が。釜。を。ま。し。ふ。小。蒙。り。は。く。最。前。より。の
 際。不。立。休。ら。ひ。て。使。居。し。が。其。時。俄。不。走。り。寄。港。木。小。舟。を。投。ん。と。岩。の。上。小。立。て。居。る
 人。丸。を。抽。留。こ。ハ。物。小。舟。や。遠。て。後。悔。せ。と。陸。の。方。小。舟。ひ。く。景。清。ハ。最。前。より。
 人。丸。が。獨。り。口。説。始。終。を。お。れ。不。飽。ま。で。不。死。を。暴。へ。る。志。氣。不。便。と。も。憐。れ。と。も。賜。を。以
 思。ひ。し。う。道。心。堅。固。ゆ。今。ハ。ま。や。子。思。小。乱。と。思。ひ。ま。り。佛。道。修。行。の。妨。ご。と。ま。の。孝

白當不見と思入より一人の盲目小敷とおれ獄小敷れしを和縣の明沙で寛罪を
 免するのとも金戸平次夫婦感激して前非を悔告不復也。其時小来る履登を詳
 不情の女は此の景清は十三が今おそめぬ信義を感じ。且平次夫婦のりの旧
 悪を悔ひ発心して佛道入るを賞讃し。更阿古屋が死を泣し。又人丸が孝を
 憐し。其脊をかひ接て叔父十三の教より物の道理を。と云ふの性悪をい
 て今日の如き不至ん初推して父小別は十年不近きその間問ひ音はれもさふり
 親を慕ふを慕ひ思ひ身を死衛不沈ま。其價りて父が老を易からせんと。心
 嬉し。いとも喜ぶ。言信ふも。某も他目や雅面め。と思んが人の
 親の心や。思ふ。忠義の存小方を忘れ一途不凝。心も女思と
 おま。手頃の小女子を。秋もあ。欄つ人丸も今。共小女を。あうらん
 思ふ。思ひ。影又。又送。遠く。バカ。

心小唯。くも妻の。思ひ。阿古屋。年紀。容貌。又悪。か。れ。か。
 いたる人。相馴。世の。易。果。操。を。女。思。
 を。居。不。便。の。心。本。愁。心。弱。涙。の。折。あり。し。斯。
 かの。苦。を。忍。び。主。君。の。誓。を。忠。義。と。甲。斐。あり。頼。朝。の。情。
 の。思。義。の。不。挫。れて。か。る。旨。目。と。し。と。信。を。人。丸。は。泣。目。を。と。ら。ひ。
 泣。く。雨。を。か。ぼ。り。心。を。母。上。の。涙。も。知。り。父。上。の。心。
 東。間。も。忘。れ。ぬ。胸。苦。げ。不。武。士。の。心。や。羨。ま。奴。家。ハ。斯。々。思。入。良。人。を。
 那。妻。子。の。か。は。り。今。ハ。何。處。不。か。を。床。一。巻。簾。音。聞。を。ま。ま。
 か。や。と。慕。慕。ひ。思。ひ。煩。ひ。の。重。き。病。不。外。り。父。上。
 捨。た。り。入。り。と。絶。入。り。人。ら。ち。を。か。ま。せ。と。叔。父。上。と。奴。家。と。と。
 枕。や。涙。不。言。語。ひ。て。涙。あ。ら。不。呼。歎。せ。休。不。息。の。出。り。と。苦。け。の。声。音。を。

叔父上と叔家と最期の暇をせきしむ。叔家不仕人か、おと八平家の忠
 臣と人々も知らず父を侍て其子の福とよぶまじ。されば必平源氏の人の妻とある
 るのま、まひを預くる法跡とあり。西親の後を吊ひて父の名をのりて母と
 今人あまむとと教へゆり終焉の言猶存不空しくあり。叔家、母の宣せし教
 を守り尼とあり。父母の縁吊ん、素より心なる不父上、死ふらむ。盲目とありて日向ふ
 ちとせり、八幡一きりりあら。目の不自由不仕をまさん。住むありぬとぬひや。筑紫の
 果ふた一人おとさんとのいと哀しく。幸く彼野不赴ひて古介保をと思へば。小女の身の卑
 身にて。その丹き族ハ覚束なく。叔父上ととも不行人と。契王おとさんとととて。あとの
 うゆる涙声。其時十二進と出。小女心のいと痛く。契后のうり。侍りゆ。某代で物捨ん。その
 時我家一人の盲目の偶と来り。爾くのうり。大磯のその一件を物捨のじ
 りと。契地方不來まる。旅中や。夜双御前不逢。うり。且馬場が坊。と斬散。と

遂行し不其隙不人丸を奪ひ取られし。そのまを小聖尼の言ふより。取物ゆり
 敢て人丸が行備を尋ひて。契所不來。人丸が入水の跡を。慌忙と
 止り今奇會をまわし。喜びとれ不増り。ふりととほく。更不懐より。一包の金
 知り。景清が不持し。契金八人丸。足下を。白雷不。とを尋の艱苦
 を。漸中不。獲はる。金多れば。受納めり。と金と。復歴を。細か
 説ふ。景清我子の孝行と十三か信義とを深く感して。落涙し。斯まハ片意地
 のいと疎ま。心憂たれと。親ら。きり。親と思ひ。百折子。不身を。苦
 辛。し。つ。金を。受て。い。心。今。の。身。は。是。て。足。之。ぬ。妻。の。阿。吉。屋。ハ。終
 辱。ま。で。我。ハ。契。泉。不。居。を。と。思。ひ。最。期。を。遂。し。と。笑。う。ら。今。も。迷。ひ。て。居。る。ら。ん。
 契。金。り。高。僧。知識。を。供。養。し。て。追。善。俸。り。を。受。て。契。泉。の。苦。難。を。免。ら。し。む。
 豈。是。孝。不。非。や。ハ。か。よ。十。三。大。人。と。契。る。を。討。ら。ば。て。契。と。契。へ。一。令。を。さ。し。成。せ。む。



景清一家

日向の

宮崎

恩恵

尊

景清

十三

戸次

小雪

八丸



忠孝不堂

忠大

景清一家

九

と懇懇を需とバ景清始終をうちめて嗟嘆して云々右幕下は
 某を斯く思ふ不忠の思ひの忠志氣の志よ又重忠の賢良足下誠心の
 心と感むる不尚余あり今更へりて我佛門に入らるる盲目と云々
 武門のる御心不想ふるふれ昔獲たりし甲綴我ありて何ふせん幸か今も
 持居れば足下返り走んと慶の裡不立入りて我綴を持て國俊不立ゆれば
 喜び感謝する其右國俊言清を正し今より後景清を日向自當とすべし我綴
 倉殿不余を稟し使ハ今日既不果ぬ雨とハる不用意の心とて後倉不立還
 景清のるハ云もさらん人丸が孝行十の信義ほひて戸平次夫婦のめが持徳の
 りふも詳不後倉ふの不立へ上べしとて馬場忠太を後倉へ將て行て弘明さし
 罪を弘さんと忠本をすれり似共木を引立ぬふち上さし景清始人小暇を告て
 立ちか又立戻て人丸を盛不招て云々今更とが父不をし綴の報ひをせんと思

と義烈の景清稟まどれば後日報ひん時もある。良時節共の心を父不傳へ
 ばとて何れを軟結不包めりものを逆与け其牙ハ舐小く来りて東の方小
 走らまふ三保谷ハ後倉の上使とあれハ人ハ多れりあきしとて磯辺不送てこれを
 望むと共時頼風まで一盞茶時不送不隔り。俣小帆のそんぐればまハヤそ
 十三丸景清を誘引庵ふれば戸平次夫婦の殿ふほひて同く庵ふ入ふり。
 其時人丸三保谷が言へり言を傳へてとて色を取らま十三解ひてこれを
 一通の文言ありければ抜き不其畧不景清ハ忠義の士人丸ハ至孝の女十六
 高義の士世小比あき三傑く我れんを感むれば強てより人丸をて父が備不侍ら
 之孝養をそむく思ふも自當の縁めてハ景清一人を糧ふのそ人丸が衣食の料
 ありよりて其地小来るのそり。知縣不相送て數々の庄園を贖ひたり。この利潤を

彼の時ハ數人の口を糊する小足ん是我老婆心之爾ハあれ嗟来食を食むと。
 廉士ハこれを受もどれば今日後を贈し不報ふれと思ひ多しと細中不書写
 たり十二読後して去つる三保谷ハ景清大人を仇敵と思ふ人ある小あつく小
 斯まども忠と孝を感激し情深きは是義士之志氣を盡せんハ頼み
 づらむや。ハ景清大人とありける小景清はて心裡ハ感し思へと爾あはぬさ
 ぞ何るを宣ふ我ハ浮世を遊しもの。れも義もかからむ念佛之味も
 あり足下宜き小計り多しと。うち仕くれば十二八人九戸平次夫婦と不細く深しと若
 池方小足を止む不定めく斯あつたれば人九が畠山有重より。賜ふ金小用なれば其え
 たらバ戸平次小苦金を返し与つたバ戸平次これを受ずて去先年十二日の我を救ふ
 まひ一令を返しまのきと思へば受む所謂ふ一と固く辞めバむとあ。ざらば
 とて共合りて景清が庵を念佛の道場不造りむ。斯て人ハ若野不屏と豊

小暮らし入丸ハ其の一人父小孝養ありみたり。彼又三保谷四郎ハ忠太を憐て
 鎌倉小還宮崎の光景を詳しけし上ハ頼朝公始終の事を熟くとけし
 むハ人丸が孝性十三が信義頼ひふきののふけり。其十三あるものハ京来何等の人あり
 やと尋問せむ。小畠山重忠出前不ありしが豫て田が物供あて其為人を知り候れば
 亡性ハ長田とて爾とののめつと十三が素性より。性行を又上きバ感下のひて宣
 まつハ長田が黨ハ我乃ハ海軍仇ありあれども庄司が家と十三が家とハ別處小均
 しく思ふあるふた之私の仇ありと。斯程の賢者を捨てて世を治るの任不ありむ今後
 を用んと思へ我招きし心志を。これ奈何て宜んと畠山小問を多くハ重忠敬て回志
 ありしを。日向國宮崎ハ天子の御領不ゆハ其地方の知縣とせば喜んで拜受せん
 され愚意の存する如しとあり小頼朝公笑せむ。ハ宜しき計し我其使のめを撰ん
 と。重忠が師黨田を召して。おがむ旨を細中不命合めむ。是汝が思人へ急と

三保谷四郎

らむよく怒むべしと更ふ三保谷不討ひの馬場忠太がるの仇をりつて我思ふ
 船のある景清法師を害せんと謀りて死刑不承せしむるの罪一
 を免して遠流まじし命をひて交りて梶原ふゆの知り伊豆の大島流し
 斬殺りまき下知を入り淡く感賞せしそれが中々の本田二郎八共回の空便を喜び
 妻哉撤ちの傳り知らせ限り多く喜びたり。それより本田八根發してまじ京師小上りて
 命を稟し旨を奏聞まじ主上より孝子義男を感感ありて銘倉より乞ひて知
 勅詩ありて別本田二郎不勅書を賜りたれば本田二郎故て兼り急き日向國入り
 十二小會つて喜びを述べ銘倉殿の旨を細言ふ述べはめて宮崎の知縣不補
 せらる勅書を手へり十三は深く感喜して聖恩と銘倉殿の鴻恩とを拜謝され
 本田田十二を伴ひて知縣の館小跡り。勅命を傳へし知縣も賞償して俄小上りと
 吏代本田二郎と打連て都をこりてより十三は景清と誤り人丸を養ひて

己が子と良増をひんことを索めたる。斯て景清法師ハ念佛三昧日月を送り
 建久七年の三月正念の大往生を遂げれば入丸の悲哀又る由表さふよく其喪小居て
 孝の道をそと人感動まじたり。その平次夫婦ハ景清が庵に住して只願
 佛道修行して終不其庵を去りて。道場とありふ。其後京家の士人小や親
 両全の小年ありたるを小人まじりありて人丸不贅増さふ夫婦の間睦しく二人
 の男子を土産し。十三は喜びて景清とわのれとが性を嗣し教育せしが成人
 の後良士とありて。二家俱不富栄へて子孫繁栄する多とふ人。

景清 松の操 卷之五大尾

